

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02827

研究課題名(和文)「見方・考え方」を働かせて古典に親しませる授業に関する小中高大の連携的研究

研究課題名(英文) A cooperation study of elementary, junior high, and high schools on lessons that make use of "views and ways of thinking" to familiarize yourself with the classics

研究代表者

菅原 利晃 (SUGAWARA, TOSHIAKI)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：20826250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、従来十分に研究されてこなかった古典教材の教訓について取り上げ、児童生徒を古典に親しませるといった観点から研究を進めてきた。教材としての『徒然草』を分析、考察するとともに、研究協力者による授業実践を行い、授業に関して研究討議を行った。古典の中の「教訓」とは、古典に表れた人間の生き方や考え方そのものであり、児童生徒は、古典に対する「ものの見方・考え方」を働かせてとらえることができるという一定の成果を得ることができた。この実績をもとに、研究報告を学術雑誌に発表し、掲載されたものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、古典教材の教訓に着目させ発達段階を考慮して、児童生徒を古典に親しませる授業について研究するものであるが、教訓に対する「見方・考え方」を通して古典に親しませるといった発想は従来なかったものである。そこに、本研究の独自性がある。特に、小学校から大学まで幅広い校種を対象とし、かつ、校種間の連携をもとに実際的な研究を行った点に意義がある。研究成果については、全国規模の学会での口頭発表、および学術誌への投稿した。また、小・中・高大接続として、研究代表者が実際の学校現場へ赴き、講演・セミナーを開催し、現場の教育への還元をはかった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we have taken up the precept of classical teaching materials that have not been sufficiently studied in the past, and have proceeded with the research from the viewpoint of familiarizing children and students with the classics. In addition to analyzing and considering "Tsurezuregusa" as a teaching material, the research collaborators practiced the lessons and discussed the lessons. The "precept" in the classics are the way of life and thinking that the human who appears in the classics, and children and students could obtain a certain result that works to grasp the "views and ways of thinking" about the classics. Based on these achievements, the research report was published and in an academic journal.

研究分野：国語科教育学

キーワード：古典教育 小中高大連携 見方・考え方 徒然草 教訓 古典に親しむ

1. 研究開始当初の背景

小学校、中学校、高等学校における「古典に親しむ」ことに関する実践的かつ、連携的な研究という点が本研究の位置づけである。

「古典に親しむ」ことに関する実践報告や先行研究は多く存するが、その多くが、小学校、中学校の古典教材を対象としたものであり、高等学校における研究は十分なものではない。また、小学校、中学校、高等学校における「古典に親しむ」ことへの発達段階を考慮した実践的・連携的な研究は多くない。さらには、『徒然草』を教材とし、その教訓に着目させ児童生徒を古典に親しませるといった先行研究は存せず、ここに本研究の独自性がある。

古典に親しむ学習指導については、その目標について、従来、漠然と示されてきた。本研究は、古典の教訓について焦点を絞り、ものの見方、感じ方、考え方を深めさせ、古典に親しむことにより人生を豊かにする態度を育てるような授業を目標とした授業研究を行うものである。

2. 研究の目的

古典の教訓(教え・知恵)を児童生徒が「見方・考え方」を働かせて読み取り、古典の世界と現代のわれわれの世界とのつながりを考えることで「古典に親しむ」ことができる。この仮説に基づき、本研究では特に、『徒然草』の教訓(教え・知恵)に焦点をあてる。『徒然草』は古典の世界に直接触れるにとどまらず、作者兼好の評から古典の世界と現代に通じる自分なりの評価を持ちうることでできる教材である。本研究では、実際に発達段階を考慮した独自の授業の工夫を行い、児童生徒にとって古典に親しむことができる教材となるように開発・考究する。

小学校、中学校、高等学校の発達段階を考慮した授業を通して、生涯にわたって古典に親しむことの糸口とさせる。古典を読み、親しむことによって、古典、文化、人間、自分自身のあるべき姿、真理を求めることを「古典に親しむ」最終的な目的・目標とし、高等学校卒業後も生涯にわたって古典に親しむことができるような足がかりとなるようにする。

3. 研究の方法

3年間の研究では、小中高、および大学との連携により各学校国語科の授業で実践し、検証を進める。

具体的には、各校種計6名の国語科教員により、『徒然草』を教材に授業構想を行い、実際の授業で実践し、ビデオ等で記録し、研究協力者全員でその成果と課題を検証する。授業の展開の研究、ワークシートの開発、生徒の感想や意見の分析を詳細に行う。

児童生徒が古典に近づき親しませることを見据えた上での、古典の世界の先人の生き方の発見と共感、いわば古典を自分のものとして消化し現在の自己の生活とのつながりをいかに体感させるべきかということに対する考察・検証の視点に、本研究の古典教育における普遍性・意義がある。また、小学校、中学校、高等学校の「学びの系統性」に関する研究成果は、他の古典教材の学習への活用も見込むことができる。古典の教訓を読み取ることを通して、古典に親しませることがどれだけできるか、発達段階に応じてどのような「見方・考え方」を働かせる授業の研究が必要であるかを明らかにする。

研究期間内の具体的な研究活動としては、教材としての『徒然草』の分析と考察、研究協力者による授業実践、教材に関する研究討議、研究成果のとりまとめと報告の4項目を立てた。として、『徒然草』の教訓について研究書や指導書などをもとに教材研究を行う。それぞれの古典で述べられている教訓について、分析を試みる。次に、として、各小学校、中学校、

高等学校の児童生徒を対象にした授業の開発を考究し実際に授業を行う。研究を進める上での電話や電子メールなどの連絡と、研究協力者全員が集まって討議を行う。特に、発達段階に応じた各小学校、中学校、高等学校の児童生徒を対象にした授業の開発を討議し、さらに考究を加えて実際に授業を行う。により、実際の授業を記録し、研究協力者全員でその成果と課題を検証する。

4．研究成果

本研究は、『徒然草』を教材とし、その教訓に着目させ児童生徒を古典に親しませる授業について研究するものである。古典の「教訓」(教え・知恵)とは、古典に表れた人間の生き方や考え方そのものであり、児童生徒は、古典に対する「ものの見方・考え方」を働かせてとらえることができるという前提をもって研究に取り組んだ。

具体的には、教材としての『徒然草』の分析と考察として、古典に対する「ものの見方・考え方」や『徒然草』の教訓について研究書や指導書などをもとに教材研究を行い、それぞれの古典教材に対する「ものの見方・考え方」や古典で述べられている教訓について、分析を試みた。その上で、研究協力者による授業実践、および教材に関する研究討議として、各研究協力者が児童生徒を対象にした授業の開発を考究した上で、実際に授業を行い、実施後に研究討議を重ねた。具体的な内容は以下の通りである。

授業実践、授業観察 北海道教育大学附属札幌小学校：小学校の言語文化(古典)に関する授業を継続的に観察し考察した。札幌市立札幌中学校：『徒然草』「仁和寺にある法師」の章段について「見方・考え方」を働かせる授業、「見方・考え方」を働かせて和歌の「自立的な読み」を目指す授業について検証・考察した。北海道函館陵北高等学校：主題単元学習を用いた「見方・考え方」にもとづく授業実践に関して検証・意見交換を行った。帯広北高等学校：「見方・考え方」を働かせて和歌の「自立的な読み」を目指す授業、「見方・考え方」を働かせて『徒然草』「奥山に猫またといふものありて」を読み解く授業の観察を行い検証・考察した。

打ち合わせ・研究協議 対面及びオンライン会議システム(Zoom)を用いて実施した。平成31年度(令和元年度)9回、令和2年度6回、令和3年度8回実施することができた。

授業実践、授業観察については、各研究協力者の勤務する学校の児童生徒を対象にした授業の開発を考究し実際に授業を行い、検証・意見交換を行ったものである。研究2年目からはコロナ禍のため、実際に教室に赴いて授業を観察することは困難なため、代わりにオンライン遠隔会議システム(Zoom)を用いて実施することができた。いずれも、言葉による「見方・考え方」にもとづくものであり、この観点にもとづく研究についてはおおむね順調に進むことができた。

総じて、3年間の研究により、古典教材に対する「ものの見方・考え方」や古典で述べられている教訓について分析を試みてきた。古典の「教訓」(教え・知恵)とは、古典に表れた人間の生き方や考え方そのものであり、『徒然草』を教材として用いることで、児童生徒は、古典に対する「ものの見方・考え方」を働かせてとらえることができるという一定の成果を得ることができた。特に『徒然草』は、「ものの見方・考え方」を働かせるという学習活動に関わって価値ある教材として認めることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第25号
2. 論文標題 「見方・考え方」を働かせる古典の授業 『大鏡』『鶯宿梅』歌説話の教材化に関して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『札幌国語研究』	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第29号
2. 論文標題 古典文学研究と古典教育 理論と実践の往還について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『札幌国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第18号
2. 論文標題 『十訓抄』『寝覚記』共通話における評語一覧	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『国語論集』	6. 最初と最後の頁 14-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 長澤元子	4. 巻 第29号
2. 論文標題 現代文と古典の非連続テキストで考える主題単元学習 コロナ禍における「深い学び」の創出について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『札幌国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長澤元子	4. 巻 第18号
2. 論文標題 社会で活用できる物語構造分析の主題単元学習 大塚英志の『ストーリーメーカー』に基づいた構造分析と創作活動を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『国語論集』	6. 最初と最後の頁 185-192
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 長澤元子	4. 巻 第18号
2. 論文標題 小論文答案作成のためのスキーマ集積の方法と実際について ICTを活用した協働的な小論文作成「小論文ノック」の一手法の提案	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『国語論集』	6. 最初と最後の頁 314-318
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤孝志	4. 巻 第29号
2. 論文標題 漢文教材のインストラクショナルデザイン 『コマシラバス』による目標と指導と評価の一体化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『札幌国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮内征人	4. 巻 第18号
2. 論文標題 知識・技能を実生活の場面に活用して課題の解決を図る方言の学習指導	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『国語論集』	6. 最初と最後の頁 329-341
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 45号
2. 論文標題 『大鏡』 「鶯宿梅」 歌説話の教材化について 新学習指導要領における「見方・考え方」に関わって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『いずみ通信』	6. 最初と最後の頁 9-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第565号
2. 論文標題 「教材を」「教材で」から「教材に」「教材と」学ぶへ 新しい時代に対応する古典の教材研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『月刊国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第65巻第5・6号
2. 論文標題 『徒然草』第十段「家居のつきづきしく」の授業 現代に通じる「ものの見方や考え方」を読み取らせることで古典に親しませる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『解釈』	6. 最初と最後の頁 22-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第24号
2. 論文標題 これからの時代に求められる国語科の教材研究 教師はどのように教材研究を進めればよいのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『札幌国語研究』	6. 最初と最後の頁 17-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第58号
2. 論文標題 「古典に親しむ」とはどのようなことか 『源氏物語玉の小櫛』の授業の一場面から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『語学文学』	6. 最初と最後の頁 37-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第28号
2. 論文標題 国語科における「授業開き」について 教員養成系大学の学生の考える「授業開き」構想	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『札幌国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅原利晃	4. 巻 第28号
2. 論文標題 「読むこと」の意義を考えるを通して古典に親しませる授業の基礎的研究 『徒然草』『源氏物語玉の小櫛』『論語』の追体験によって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『札幌国語教育研究』	6. 最初と最後の頁 33-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 『大鏡』『鶯宿梅』歌説話の教材化について 新学習指導要領における「見方・考え方」に関わって
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第20回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 古典文学研究と古典教育 問題の所在、並びに史的展望
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第21回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長澤元子
2. 発表標題 コロナ禍における主題単元～古典からニュースまで～
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第21回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 国語科を起点とする「教科横断」的学習に関する考察 「教科横断」は「手段」か、「目的」か
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第22回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 「古典文学を教えるということ」序説 理論と実践の往還について
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第23回例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長澤元子
2. 発表標題 古典は本当に必要か（こてほん@函館陵北高校） 生徒に深い学びを起こさせるための効果的手法について～新指導要領を見据えた授業実践～
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第24回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 理論（文学研究）と実践（教育）の往還をめざす教材研究 『十訓抄』『寝覚記』共通説話の教材化について
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第25回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長澤元子
2. 発表標題 同期非同期を活用した話し合い実践
3. 学会等名 札幌国語教育研究会第25回例会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 新学習指導要領における古典の教材研究について 『徒然草』『源氏物語』を中心に
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 明治文語文の教材化に関する一考察 『露團々』章頭俳句の考察をもとに
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 『万葉集』の教材化に関する一考察 「令和」の出典「梅花の歌三十二首」の教材研究
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長澤元子
2. 発表標題 「深い学び」を生む主題型単元学習について
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 加藤孝志
2. 発表標題 「主題型単元」によるA L型学習の設計と展開
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 読書の意義を考えるを通して古典に親しませる授業 『源氏物語玉の小櫛』 「昔の事を、今のわが身にひきあて、なずらへて」について
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 「読むこと」の意義を考えるを通して古典に親しませる授業の基礎的研究
3. 学会等名 埼玉国語教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 これからの時代に求められる国語科の教材研究 教師はどのように教材研究を進めればよいのか
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長澤元子
2. 発表標題 シチズンシップを意識した現代文の学習指導
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋和寛
2. 発表標題 和歌の自立読みを目指して
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅原利晃
2. 発表標題 『万葉集』「梅花の歌三十二首」の板書構想など
3. 学会等名 札幌国語教育研究会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	黒澤 英靖 (KUROSAWA HIDEYASU)		
研究協力者	高橋 和寛 (TAKAHASI KAZUHIRO)		
研究協力者	加藤 孝志 (KATO TAKASHI)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	戸川 貴之 (TOGAWA TAKASHI)		
研究協力者	長澤 元子 (NAGASAWA MOTOKO)		
研究協力者	宮内 征人 (MIYAUCHI YUKITO)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関